

詩と保健の「関連」指導——詩教育の研究（6）

足立悦男

この論文では、堅田美穂氏（高知県高岡郡大野見中学校）の単元「生命の誕生」という実践を取り上げる。堅田美穂『国語科における詩教育の機能に関する研究』（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 一九九三年一月）所収の実験授業である。

この実践を取り上げるのは、二つの理由による。一つは、国語科と保健体育科という、全く異質の教科の教育内容を「関連」させるという、先駆的な研究とみられるからである。国語科（詩教育）の教科内容を、他教科の教科内容との「関連」において明らかにする試みである。

もう一つの理由は、この研究が「詩教材の機能」を明らかにしようとしているからである。「詩教材の機能」の研究は、私自身も、これまで研究課題としてきたことであった。

堅田氏は、この研究の動機を、次のように述べている。

《教師が直接詩を丁寧に教えることがなくても、詩が詩として機能するなら学習者は詩の言葉と自分がおかれている場の状況によって自力で鑑賞を行うのではないかという考え、或いは、他の学習目標を達

成していくうえで、詩は有効に作用するのではないかという考えが、この研究の源にはある。このような考えは、足立悦男氏の『新しい詩教育の理論』に出会い、小規模校に勤務している中で生まれたものであった。》（はじめに）

この研究は、このような問題意識から発想された、ということである。とくに、「詩が詩として機能する」ための「場」の設定という観点から、この実践に実験性をもたせている。「詩の教材としての価値は、学習者と詩がおかれる場の関係の中で決まる」（はじめに）という研究仮説である。拙著『新しい詩教育の理論』（一九八三年）は、「詩教材の機能」について、いくつかの角度から考察しているが、詩教材の詩論的研究であって、授業における「場」という考え方をしているわけではない。したがって、詩教育における「場」という発想は、堅田氏に独自のアンゲルである。

一 単元「生命の誕生」の構成と指導計画

単元「生命の誕生」は、基本的には保健体育科の授業であるが、国語科(詩)との「関連」指導の試みでもあった。国語科サイドからの実験的テーマは、「保健の学習内容と組み合わせることによって、学習者の詩の鑑賞がどう深まるか(詩と組み合わせればあい、保健の学習内容に詩がどういう作用を及ぼすか)」という研究仮説であった。

なお、この実践は、同校の高橋由美子氏(保健体育科担当)との合同授業(チームティーチング)である。

単元構成と指導計画は、次のようであった。

1	対象者
	大野見中学校 二年生十八名(男子八名、女子十名) 大野見中学校 三年生十四名(男子七名、女子七名)
2	授業の流れ(全 二時間)
1	命の芽生え(受精) (二時間)
2	生命誕生(胎児の成長と出産) (二時間)

以下、第一時、第二時と順をおって分析していく。そして、さいごに、この実践の意義について考察していくことにする。

二 「生命の誕生」第一時の授業

「生命の誕生」第一時の指導計画は、次のようであった。

1	学習内容を示す (保健)
2	詩を読む (国語) 詩の題「頌歌」の意味を説明する。
3	命のものは何であったか考えさせる。どうやってできたか考えさせる。 (保健)
4	命の芽生えの仕組みを理解させる。 (保健)
5	詩を読む。 (国語) ——線の箇所が理解できたか確認する。
6	授業の感想を書く (宿題)

この授業は、単元名「生命の誕生」とあるように、また、授業題目「命の芽生え」(第一時)「生命誕生(胎児の長長と出産)」(第二時)とあるように、基本的には保健体育科の教科内容である。したがって、保健の教科内容に国語科(詩)の教科内容が組み込まれた、という形になっている。そして、保健の学習内容を示したあとで「詩を読む」、そして保健の指導のあとでまた「詩を読む」、という構成である。これを見ると、「詩が詩として機能するなら学習者は詩の言葉と自分がおかれている場の状況によって自力で鑑賞を行うのではないか」、という研究仮説によって構成されていることが分かる。

表1 第1時の指導計画案

保健体育科(保健)指導計画案			
1992年5月28日(木)		第3・6校時	指導者 高橋由美子 堅田美穂
単元名	生命の誕生(いのちの芽生え・受精)		1/2
《ねらい》 ○いのちの芽生えのメカニズムを知る。 ○いのちの芽生えのメカニズムを詩で読み取ることができる。			
学習内容	発問・指示	指導上の留意点	資料など
・詩を読む ・自分のいのちについて考える ・いのちの芽生えのしくみを知る ・詩の内容を理解する。	1) 詩を聞きながら詩の内容を考えてみよう。 2) みんなのいのちは、何からできたと思いますか。 3) 詩に用いられている比喩は、それぞれ何をさしていますか。	・比喩の多いことに気づかせる。 ・父親(精子)母親(卵子)の存在に気づかせる。 ・精子、卵子、受精卵について説明する。 ・いのちの始まりは、精子と卵子が合体した受精卵が始まりであったことを確認させる。 ・保健の教科内容と関わらせて理解できているかどうか。 ・何がどのように比喩されているか気づかせる。	詩のプリント 頌歌 図・写真

この「指導計画」にもとづく、一時間の指導計画案は、次のとおりである(表1)。

そして、「生命の誕生」第一時で使用された詩(「頌歌」)は、次のような作品である。

頌歌
新川和江

* Ovum

女のなかに

月ごとにあたらしく創り出されて 昇る太陽

生命の神秘をたたえ

母なる大地を あたたかく あかく 照らす光

神からつかわれた

選ばれたる者のおとずれを静かに待つ

期待と

可能性の火

* Spermatozoon

かれらはいそぐ いそぐ いそぐ

急流をさかのぼる魚群のように

水泳選手の集団のように

かれらはおよぐ およぐ およぐ

2億 3億 おびただしい数の仲間のうちから

ただひとり

選ばれたる者の栄冠をかちとるために

昏い谷間を通り抜け

エベレストよりもけわしい峰々をつぎつぎ踏破して

力つきて斃れた友の屍をのりこえ

かれらはひたすら いそぐ いそぐ

かの宮殿の奥処

かがり火に守られて夢みる真珠に

誰よりも早くゆきつくために

真球は目ざめる 愛の名によって

真珠は実る 祝福された一つのめぐり逢いを孕んで

この全き合一への願望と

種族保存の本能が かれらをいつもいそがせてやまない

原始から未来へ

永劫につきざる生命の河となって

滔々と かれらはきょうも 流れる 流れる

— 某百科事典の顕微鏡写真に添えて

「頌歌」とは、「神の栄光、君主の徳、英雄の功績などをほめたたえる歌」のことである。この詩で、「かれら」「選ばれたる者」は、作者によって、まさに「神」「君主」「英雄」のイメージで描かれている。

「Ovum」はドイツ語で「卵子」、同じく「Spermatozoon」は「精子」の意味である。この詩では、日本語の「精子」「卵子」「受精」と

いった用語は使われていない。その代わり、ドイツ語の医学用語でもって暗示してある。日本語の直接表現を避けたのは、生命行動の神秘を、比喩だけの力によって描きたかったからだと思われる。

授業の展開は、堅田氏によると、次のようであったという。

《第一時間目は、まず高橋教諭(保健体育担当)が学習内容は「命の芽生え」であることを極めて簡単に伝えた。

次に堅田が資料プリントを配布し、詩の題「頌歌」の意味を説明した。その後、一回範読をした。「Ovum」「Spermatozoon」は訳さずそのまま読んだ。「難しい」「何のこと？」という声が聞かれた。

「比喩で書かれているのかな？」という声もあった。「比喩が使われています。何が、どう比喩されているのだろう。この時間の終りには分かる」と言った後、自分で読みながら、意味が分からない箇所には線を引くよう指示をした。》

《分からない箇所があるかどうか、線が引かれているかどうか確認した後、授業者を交代した。

保健体育科の保健の学習は、ほぼ指導案通りに進められた。「精子」「卵子」「受精卵」が写真で黒板に掲示され、受精の仕組みが説明された。学習が一通り終了した時点で、授業者は再び堅田になる。

「分からなくて線を引いている所がありますね。詩を読みますから、そこが分かった人は線の上にもる印をつけてください。」と言い、詩を読む。机間巡視してプリントを見ると、生徒の引いた線の上には、○印がついており、比喩されているものが理解されたと考えた。「頌歌」「Ovum」「Spermatozoon」「真珠」「かれら」などの意味を問い、授業を終了する。

一授業時間の中で授業者は、高橋・堅田・高橋・堅田となった。授業時間は高橋四十分、堅田十分であった。授業の感想は宿題にして、書いてくるように指示した。》

このように、一時間の中で、詩（国語科）の授業は、わずか一〇分である。難解な比喩で成立する「頌歌」という詩が、わずか一〇分の鑑賞によって、「理解された」という手応え（堅田）が得られた、という。「受精」のメカニズムを学習内容とした保健の授業との「関連」において、可能になったわけである。つまり、「受精」のメカニズムの指導によって、生徒たちの中に、「頌歌」の比喩を受容するベースができたと思われる。そして、比喩を受容するベースを得たことで、「詩が詩として機能する場」が成立し、「自力の鑑賞」が可能になった、と考えられる。ここで、保健の指導は、保健の教科内容の指導として自律している。その上で、国語科の授業の長い「導入」の役割も果たしている。

ここでの「関連」指導は、科学（保健）と文学（詩）という異質なジャンルの間で行われた。概念（科学）と形象（文学）という累質な表現方法の相互的な交流を試みた実践である。そして、科学の「知」の領域が、文学の「像」の世界の受容に、確かな基礎として機能していることが分かる。

堅田氏の設定した「教材としての価値は、学習者と詩がおかれる場の関係の中で決まる」という研究仮説は、この点で、じゅうぶん証明できている。詩の受容には、受容しやすい「場」の成立が不可欠であることが分かる。そして、学習者の「自力の鑑賞」は、詩の世界を受容しやすい「場」の演出によって可能であることも、この実践によって明らかになったことである。

三 「生命の誕生」第二時の授業

第二時のテーマは、「生命の誕生（胎児の成長と出産）」である。指導計画は、次のようになっている。

- 1 前時の学習内容の確認・今回の学習内容を示す。 (高橋)
- 2 人間の発育の過程には、生き物の進化の歴史を見ることができ、ことに気付かせる。 (高橋)
- 3 へその緒と胎盤の役割について理解させる。 (高橋)
- 4 詩を読む（吉野弘「I was born」） (堅田)
- 5 出産という営みは母親側が一方的に起こすのではないことを知る。 (高橋)
- 6 詩を読む（三木卓「客人来たりぬ」 新川和江「歌」） (堅田)

保健と国語科（詩）を組み合わせる、授業の展開は、第一時とほぼ同じである。「生命の誕生」という学習内容は、基本的には保健体育科の教科内容である。そして、保健の学習内容として、「生物の進化の歴史」と「へその緒と胎盤の役割」を指導したあとで「詩を読む」、「出産」の指導のあとで「詩を読む」、という構成になっている。この第二時のねらいも、「詩が詩として機能するなら学習者は詩の言葉と自分がおかれている場の状況によって自力で鑑賞を行うのではないか」、という研究仮説である。

表2 第2時の指導計画案

保健体育科(保健)指導計画案			
1992年5月30日(土曜日)		第1・2校時	指導者 高橋由美子 堅田美穂
単元名	生命の誕生(胎児の成長と出産)		2/2
《ねらい》 ○生命誕生の過程を知る。 ○引き継がれていくいのちの尊さを知る。 ○子どもが生まれた時の父親、母親の喜びを知る。			
学習内容	発問・指示	指導上の留意点	資料など
・胎児の成長 ・へその緒と胎盤 ・詩を読む ・出産について ・詩を読む	1) これは、誰の赤ちゃんだと思いますか。 2) 人間が生きていくには、最低酸素と栄養が必要であり、私たちは呼吸をし、食物を取っています。では、母体内にいる赤ちゃんはどのようにして酸素や栄養をとっているのでしょうか。 3) 妊娠10か月(280日)に近づくことを臨月といい「もうそろそろ生まれるよ」という合図があります。その合図のことを陣痛といいます。それは誰が引き起こすのでしょうか。	・人間の発育の過程には、生き物の進化の歴史を見ることができると気づかせる。 ・へその緒と胎盤の役割について理解させる。 ・生命は引き継がれているということを考えさせる。 ・出産という営みは、母親側が一方的に起こすのではなく胎児の積極的な作用が関わっていることを理解させる。 ・詩を読んで、父親母親の喜びを感じ取らせる。	図 写真 へその緒 詩のプリント I was born 図 詩のプリント 客人来たりぬ歌

第二時の「指導計画案」は、次のようであった(表2)。

詩と保健の「関連」指導——詩教育の研究(6)(足立)

第二時で教材化された「詩」は、次の三編である。各作品について、引用しながら、少し解説を加えてみることにする。

① I was born 吉野 弘

確か 英語を習い始めて間もない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと 青い夕靄の奥から浮き出るように、白い女がこちらへやってくる。物憂げに ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から眼を離さなかった。頭を下にした胎児の 柔軟なうごめきを 腹のあたりに連想し それがやがて 世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎだ。

少年の思いは飛躍しやすい。その時 僕は(へ生まれる)ということとが まさしく(受身)である訳を ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。

— やっぱり I was born なんだね —

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返し返した。

— I was born や。受身形だよ。正しく言うう人間は生まれさ

せられるんだ。自分の意志ではないんだね――

その時　どんな驚きで　父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の眼にうつり得たか。それを察するには、僕はまだ余りに幼なかつた。僕にとってこの事は文法上の単純な発見にすぎなかつたのだから。

父は無言で暫く歩いた後　思いがけない話をした。

――^{せむぎ}蛭蟻という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだがそれなら一体　何の為に世の中に出てくるのかと　そんな事がひどく気になつた頃があつてね――

僕は父を見た。父は続けた。

――友人にその話をしたら　或る日　これが蛭蟻の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると　口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても　入っているのは空気ばかり。見ると、その通りなんだ。ところが　卵だけは腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで　まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉もとまで　こみあげているように見えるのだ。淋しい　光の粒々だったね。私が友人の方を振り向いて（卵）というとき　彼も肯いて答えた。（せつなげだね）。そんなことがあつてから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは――。

父の話のそれからあとは　もう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく　僕の脳裡に灼きついたものがあった。

詩と保健の「関連」指導——詩教育の研究（6）（足立）

――ほっそりとした母の　胸の方まで　息苦しくふさいでいた白い　僕の肉体――。

詩集『消息』（一九五八年）所収の作品である。散文詩の形態をとつて、「生まれる」とはどういうことか、という思想的な問いをもつ詩である。とくに、父の語る（蛭蟻）の話は、（生き死にの悲しみ）を濃密なイメージで表現している。

この詩については、かつて私も、実践を発表したことがある。「（父）との対峙——吉野弘『I was born』」（拙著『現代詩の授業』所収一九七七年）である。「（父）との対峙」というテーマでの、高校二年を対象とした授業である。

この詩は、高校の教科書教材として発掘された詩である。現在でも、高校の教材として授業されることが多い。堅田氏の実践は、中学生（二・三年生）である。作品のレベルと、生徒の関心からすると、学習者の学年としては下限であると思われる。この作品を、中学生を対象にして、国語科だけの教材として扱うとすると、かなり難解な教材である。その点を、保健との「関連」指導によって、クリアできるかどうか。保健との「関連」指導によって、「自力の鑑賞」が成立するかどうか、という実験的な意味がある。

② 客人来たりぬ　三木　卓

今日で世界が亡ぶやも知れぬある日
つまり　ありふれたひるさがり

ぼくの妻の股の間に小さな火柱がたつと見るや
たちまち彼女は母親になり その夫は父親になった

サイレン鳴らず 一天俄かにかき曇らず

ただ母親は涙をちよっぴり流して眠り

父親はその脇でちらし寿司の上をとってビールを飲んだ

とうとうやってきた やって来た!

アミーバからおさかなやにわたりの時代を通過して

こうのとりを何匹も乗り潰すほどの

遠路はるばる ごくろうさま!

ようこそ!

えりにえって こんなまずしい夫婦のところへ

ほんとうに有難う:

だが心配性の父親は どうも心配になり

ひきつづき聞いてみずにはいられない

—あなた: 空気はうまく吸い込めますか?

—耳に穴があいているだろうね?

指が六本なら十二進法、四本なら

八進法が得意になってしまふ

そそっかしいぼくの妻はきつと

どこかでへまをしかしているだろう

ああ だがほんとうだ 人間というものは

読んだ本に書いてある通りに 生まれて育っていくのだ

娘も中学生もばあもおまわりも

かたつむりやかわうそや青大将

うちの裏庭(といっても家主のだが)のこれの木などと変りはない
そうしてぼくも父親になったが

その時現在 世界一新品のおやじは

運びこむべき巨大なミルク缶の重量を想像しながら

実はするどく 耳をおっ立てているのだ

ふいに未来と想像していたようなものは裂け

そのむこうに 現実の街並がせりだしてくる

かつて そのなかから

暗い空をよぎってひびいた叫びごえは

これからはぼくの喉のものになり 生れたての娘のものになる

それが証拠に 父親になったぼくに

町の連中が投げる親愛のこもった眼差しをみるがいい

それが かれらの乳香と没薬だ だから

そのこめられた意味を知ること

いまぼくは(希望)を語ることが必要な男になったのだ

詩集『東京午前三時』(一九六六年)所収の作品である。作者がはじ

めて父親になったときに書かれた詩である。話者は不慣れた父親であり、

不慣れた父親としての不安定な存在感を、宙吊りにしたような奇妙な世

界である。生まれてきた子供を(客人)とよび、みずからを(世界一新

品のおやじ)とよび、父親となった自画像をユーモアラスに描いている。

「I was born」(吉野弘)の描く、(生き死にの悲しみ)を見ている

父親とは対照的な、ユーモラスな父親像である。

③ 歌 新川和江

はじめての子を持ったとき
女のくちびるから
ひとりでに洩れだす歌は

この世でいちばん優しい歌だ
それは 遠くで

荒れて逆立っている 海のたてがみをも

おだやかに宥めてしまふ

星々を うなずかせ

旅人を 振りかえらせ

風にも忘れられた さびしい谷間の

瘦せたリングゴの木の枝にも

あかい 灯をともし

おお そうでなくて

なんで子どもが育つだろう

この いたいけな

無防備なものが

詩集『夢のうちそと』（一九七九年）所収の作品である。

大岡信は、この詩に「噴きあげる母性」をみて、次のように批評している。《この詩は、「産む」ことが女においてどれほど深い世界とのつながりのきづなになるかをうたってみごとである。この詩の成功は「おほ そうでなくて」以下四行の持つ、有無をいわせぬ説得力にかかって

いて、この四行が出現するうえに、そこにいたるまでの詩句の、やや甘美にすぎ、楽天的にすぎると思われる運びが、逆に生きてくるのである。そしてこの四行を書かせたものは、新川和江の中から噴きあげる母性にほかならない。》（「新川和江の詩」『花神ブックス3 新川和江』花神社 一九八六年）

大岡のいう「噴きあげる母性」という評は、一言で、この詩の世界をうまくとらえている。わが子を このへいたいけな／無防備なもの」とみるのは、「噴きあげる母性」からの自然な発想である。わが子を（客人）とみる三木卓のユーモラスな発想とは、対照的である。それは、二人の詩人の資質の違いでもあるが、普遍化していえば、母親と父親との立場の違いとみることもできる。

このように、三編の詩はそれぞれ、全くタイプのちがう作品であるが、「生命の誕生」というテーマでは一貫している。「生命の誕生」というテーマでのミニ・アンソロジーといえる。この授業のために、堅田氏の開発したミニ・アンソロジーである。アンソロジーの構成には、国語科教師として、独自のアンゲルを必要とする。教科書の詩をどう解釈し、どう指導していくか、という一般的な読解・鑑賞指導では味わえない、教材開発の面白さがそこにある。

さて、この三編の詩を教材化した、第二時の授業は、以下のように展開された。

《まず高橋教諭が、前回の授業の復習をし、「受精卵はその後どうなるか」というこの時間の学習内容を示した。次に黒板に、うさぎ・とかげ・人の初期の形を示し、「どれが人間か」という問いを出した。（図

は省略(足立)正解は、三年生の場合十四名のうち四名であった。うさぎ・とかげ・人の成長過程を四段階で示したが、四段階めで笑いがおきた。人だと思っていたのが、とかげやうさぎになっていったからである。これらの図(図は省略(足立)から、ある段階までは他の動物と形がさほど変わらないことに気付かせた後、人間の成長過程の中に「生命の歴史」、自分たちの「進化の歴史」を見ることができるとを説明した。

次に、人間のおなかの中で赤ちゃんはどうやって生きているのかを生徒に尋ねた。生徒たちは胎児が母親とつながっていることは知っているが、どのようにつながっているか想像できないようで、母親のへそとつながっていると答えた生徒がいた。そこで、へその緒・胎盤の説明をした。

その後、交代をして堅田が次の詩(「I was born」)を読んだ。詩を読んだ後、「生まれるのは自分の意志ではないけれど、命を生み出すことは命がけのことであるんだよ」というコメントをつけた。

その後、高橋教諭と交代した。「生まれる合図は誰がしているのか」という問いに、全員が「赤ちゃんだ」と答えた。そこで、高橋教諭は「赤ちゃんはすでにひとつの命として育ってきているんだよ」と強調した。胎児の出産時の動きを四枚の絵で示した。(絵は省略(足立))
「赤ちゃんはこのように自分の力で生まれようとしている」と絵の説明をした。出産の際に、力が尽きる赤ちゃんもいることをつけ加えた。「このように、出産は母親と胎児が力を合わせて行う」ということを自分の経験を交えながら話した。

その後また交代して、堅田が次の二編の詩(「客人来たりぬ」

「歌」)を読んだ。これら二つの詩は時間がなくなったこともあって、読むだけに終わった。最後に高橋教諭が「この詩のように皆も祝福されて生まれてきたのですよ」と言って授業を終えた。二時間の授業を受けての感想を書いてくるように指示した。

二時間目の授業では、授業者は高橋・堅田・高橋・堅田の順になった。この時間も高橋四〇分、堅田一〇分となった。》
このように、第二時の授業も、基本的には、「生命の誕生(胎児の成長と出産)」という保健体育科の教科内容であった。

この指導をみると、「うさぎ・とかげ・人の初期の形」という資料や、その「成長過程の四段階」という資料や、「へその緒・胎盤」という話題は、保健の教材であって、国語科の教科には存在しない教材領域である。そのような保健の指導のあと、「I was born」(吉野弘)という「詩を読む」。その後、「胎児の出産時の動き」という資料は、また保健の教材であり、そのあと「客人来たりぬ」「歌」という「詩を読む」という構成になっている。

この授業構成は、保健と詩との「関連」指導であるから、関連を貫く接点が必要とする。「指導上の留意点」をみると、「胎児の成長」「へその緒と胎盤」と「I was born」という詩は、「生命は引き継がれている」ということを考えさせる」という接点をもっている。また、「胎児の出産時の動き」と「客人来たりぬ」「歌」の二つの詩は、「父親母親の喜びを感じとらせる」という接点である。

授業展開をみると、まず保健として、「胎児が母親とつながっている(へその緒・胎盤)」ことを指導したあと、「I was born」の詩を、「出産は母親と胎児が力を合わせて行う(陣痛)」ことを指導したあと、

「客人来たりぬ」「歌」の二つの詩を読む、となっている。生徒たちは当然そこで、「生命は引き継がれている」こと、「父親母親の喜び」という接点を、それぞれの詩の中に見出すことになる。というより、生徒たちが「接点」を見出させるように、授業が仕組まれているわけである。「関連」指導においてのみ可能な授業構成である。

このような指導においては、「関連」の接点を何にするかが、重要なポイントになる。単元名は同じであったとしても、両者の教科内容が付きすぎると「接点」は機能しない。離れすぎると「接点」そのものの役割をしなくなる。両者の教科内容を「付かず離れず」の関係におくことが必要である。関連教科の「接点」は、生徒たちの「発見」によって見出されるように仕組むことがポイントであると思われる。

さて、第二時において、詩教材は、どのように「機能」したのであるうか。また、生徒たちは、保健の指導によって、「自力で鑑賞を行う」ことができたかどうか。その点は、次章でとりあげる、生徒たちの感想文の分析で明らかにしてみたい。

四 生徒の感想の分析

この授業を、生徒たちは、どのように受けとめたであろうか。保健だけの授業でもなく、国語科だけの授業でもない。二つの教科の「関連」指導の試みに、生徒たちがどのような反応を示したのか、興味ぶかいところである。

まず、授業者自身の分析に即して考察することにする。授業者は、次

詩と保健の「関連」指導——詩教育の研究(6) (足立)

のような観点から自己分析をしている。

- 1 「保健」と「詩」という組み合わせの指導法を生徒たちはどのように受けとめたか。
- 2 詩が保健の学習内容にどのような影響を与えたか。
- 3 保健の学習内容が詩の理解にどのような影響を与えたか。

1は「組み合わせ」(関連)という指導方法について、2は詩の指導が保健の教科内容に与えた影響について、3は保健の教科内容が詩の受容に与えた影響について、ということである。

1の「組み合わせ」(関連)という方法について、堅田氏は、生徒の感想を引きながら、次のように述べている。

《「保健と詩」という組み合わせで授業をしたことは一度もなかった(3年・女子) 生徒たちである。したがって「保健と詩」ときいて『どんなことをやるがやろう(やるのだろうか)』と『(2年・男子)るし、「保健と詩を結びつけることができるのかな、なんだか変だな」(2年・女子)と興味・関心を示していることが分かる。》

教室へ行って、「保健の授業を二人でやります。」と言ったとき、生徒の顔に微笑がみられた。好意的な微笑であったと判断してよいと思う。「保健と詩」という組み合わせを生徒たちは奇妙に思うと同時に、どのような授業展開になるか、どのような学習内容かという興味もあつたと思われる。》

これを見ると、保健と詩の「関連」学習について、生徒たちはかなり

の「興味・関心」を示している。「意外な組み合わせ」という関心である。逆にいえば、授業カリキュラムにおいて、教科という枠組みがそれだけ強く固定してことがわかる。学習者の「興味・関心」は、授業成立の重要な条件である。それだけに、このような、教科の「組み合わせ」による「関連」指導には、大きな可能性がある。

2の「保健の学習内容が詩の理解にどのような影響を与えたか」については、次のように分析されている。

《保健の学習内容に詩が加わったことについて、生徒は次のように述べている。

- ・保健の授業に詩が入って、とても分かりやすかったです。(2年・男子)
- ・保健は難しい言葉などたくさんあるけれど、詩はたとえにしているので分かりやすい。(2年・男子)
- ・保健の授業は「命」といってもあまり分からなかったけど、詩が入ると分かりやすかったです。(2年・男子)
- ・保健の授業だけだと分からないところもたくさん出てきただろうけど、詩を入れてとても分かりやすくなったと思います。(2年・女子)

・保健の難しい部分を詩と一緒にやると、けっこう分かりやすかったです。保健の授業なら分かりにくかったところも、詩と一緒にやったので分かりやすかったと思いました。(2年・女子)

これらの感想から、保健の学習に詩を取り入れることによって生徒は、保健の教科内容をより理解しやすくなったと受け止めていることが分かる。例えば「受精」の説明にしても、保健の学習においては表

現が直截的であるが、それを「頌歌」のように詩の言葉で表現されると、言葉を具体的にイメージできるようになり、それを生徒は「わかりやすい」と感じているのではなからうか。》

このように、生徒たちは一様に、学習内容が「分かりやすかった」と感想を述べている。そして堅田氏は、詩の介入によって、保健の学習内容が「理解しやすくなった」と評価している。では、生徒たちのいう「分かりやすさ」は、詩教材のどこから引き出されたのであろうか。生徒たちの感想には、たとえば、次のような指摘がある。

- ・保健の内容を比喩表現で表したりすると、理解しやすくて、勉強というわくがとれるような気がした。(2年・女子)
- ・保健の本で「赤ちゃんが生まれてきた」と書かれているよりも詩で「赤ちゃんが生まれてきた」と書かれてあるほうが、詩には比喩が使われるので、保健の本よりか何倍か分かるし、何倍か想像することが出来ます。(2年・女子)
- ・詩が入って、他のものでたとえてあるので分かりやすかったです。(3年・女子)

といった感想である。これを見ると、「分かりやすさ」の理由を、はっきりと「比喩」(「たとえ」)があるから、と答えている。詩の表現方法に対する関心である。「比喩」は、文学(とくに詩)表現の中心的な技法である。文学(詩)に固有の表現技法であるから、「詩としての機能」が十分発揮されていたことが分かる。

また、次のような感想にも注目してみたい。

・保健の授業の中で四つの詩を聞きました。その詩は母親の立場であつたり、父親の立場であつたりしたけれど、その詩を聞いて、私たちが経験したことのない、いろいろのことが分かりました。
(2年・女子)

この感想にある、「母親の立場」「父親の立場」という指摘である。詩における、話者の「立場」に対する関心である。つまり、話者の「立場」が明確であつたことが、生徒たちに「わかりやすい」という印象を与えているのである。

詩は、詩人の自己表現の世界である。まして、親とは何か、子とは何か、といったテーマでは、詩人の「立場」をぬきにした表現世界はありえない。自然科学をベースとする保健の授業との決定的な差異である。科学はひとの固有の「立場」を問うことはないからである。したがって、生徒たちのいう「わかりやすさ」は、「比喩」表現に加えて、話者の「立場」の「わかりやすさ」でもあつたと思われる。

3の「保健の学習内容が詩の理解にどういう影響を与えたか」について、堅田氏は、次のように分析している。

《生徒は次のように述べている。

- ・詩ははじめは難しく分からなかつたけど、保健を勉強した後では「なるほど」と思いました。(2年・男子)
- ・(詩の)ここが良かった、ここが分からなかつたというのは、保健の勉強をしていくと分かりました。(2年・女子)
- ・ただ詩を習うよりずっと分かりやすかつたです。(3年・男子)

詩と保健の「関連」指導——詩教育の研究(6) (足立)

・詩を読んだらなんとなく「命」というものが分かつた。(3年・男子)

・保健で勉強したことを詩でやると、その詩を読むだけで何となく分かります。(3年・男子)

これらの感想から、最初は「頌歌」という詩の意味内容が理解できなかったが、保健の学習をすることによって、詩を理解していることが分かる。生徒たちにとってみれば、学習したことをもとにして、詩を読むことが可能になるわけで、「ただ詩を習うよりずっと分かりやすかつたです」(3年・男子)という感想や、「その詩を読むだけで何となく分かります」(3年・男子)という感想に、詩の授業でなくとも自然に詩を感じている姿を見いだすことができる。詩の内容が保健の授業によってリアリティを持ち、切実なものとして受け止めることができるようになるからだと考ええる。(中略)

また、生徒の、「詩は表現が豊富で」(3年・女子)という言葉や「詩というのは表現の仕方がたくさんあつて」(3年・女子)という言葉から、詩の言葉による表現を教師の言葉と比較して意識していることが指摘できる。文学の言語である詩の言葉と、どちらかと言えば論理的な言語である保健の学習に用いられる言葉が、同じ意味内容を持って同時に提示された場合、学習者の言葉への意識はより強く喚起されるようである。》

堅田氏は、ここで、二つのことを指摘している。

一つは、「詩の内容が保健の授業によってリアリティを持ち、切実なものとして受け止めることができる」という指摘である。この点は、さきの分析にあつた「比喩」と「立場」の問題と深くかかわっている。つ

まり、「比喩表現」は生徒たちのイメージによる受容を容易にし、明確な「話者の立場」は、親と自分との関係に容易に置き換えることができ、「リアリティのある受容」を可能にしたのである。

もう一つは、「文学の言語である詩の言葉」と、「論理的な言語である保健の学習に用いられる言葉」の違いである。比喩(たとえ)に代表される詩の言葉と、科学用語としての保健の言葉(術語)とは、明らかに異質である。その異質さにおいて、かえって、生徒たちの「言葉への意識はより強く喚起される」という指摘である。各教科で使用される言語の差異性が、生徒たちの「言葉への意識」を強くする、という興味ぶかい指摘である。この点も、「関連」指導の試みにおいて、一般化・普遍化できるメリットである。

また、この授業を参観した同僚教師からは、次のような感想が寄せられている。

- ・詩が加わることによって、保健の授業が柔らかくなる。想像や夢が加わる。
- ・科学的なものに情緒が加わる。
- ・性教育といってそのものずばりを示すよりも、この授業方法が、大野見中学の生徒に合っている。
- ・同じ学習経験をもとにして詩を読むことができる。
- ・詩があることで、学習したことが意味づけられ記憶に残るだろう。
- ・「保健体育」と「国語(詩)」という教科相互の関連性を生かした指導という点で注目した。小規模校であるから、今後、教科相互の関連性を生かす学習指導が考えられるのではないか。

このような同僚の感想をみても、この授業において、詩教材に固有の役割のあったことが確認されている。保健担当の高橋氏は、「生徒の実態から考えても、保健の学習内容への理解が、詩を組み込むことによって深められたのではないだろうか」と述べている。

以上のようにみても、この実験授業の試みは、生徒たちの感想、同僚教師の感想によって、当初の実験意図をじゅうぶん達成していることがわかる。

五 単元「生命の誕生」の意義

さいごに、この実験授業の意義について、三つの観点からまとめておくことにする。

一点めは、科学と文学の「幸福な関係」が成立していることである。なぜであろうか。科学と文学とは、一般に、全く異質なジャンルとみなされている。その二つの教科内容が、相互に、しかも相乗的な成果を得られたのは、なぜか、ということである。

堅田氏は、詩の受容に果たした保健の役割について、次のように述べている。

《保健の授業での説明や、黒板に掲示される写真や図版が、詩の読みを促進させる役割を興したといえよう。保健の授業という同時間における同一経験を元に、詩の内容を言葉で読むだけではなく、他のものを媒介として読む経験を一齐にしたといえよう。詩の理解が容易になるとともに効果的になされたと言える。》

保健の「説明」や「写真・図版」の資料が、「同一経験」の下地を作った、という指摘である。

また、保健の教科内容の理解にさいして、詩の果たした役割について、堅田氏は、次のように述べている。

《保健の学習内容には直接含まれていないものが、詩が入ることによって付加される。例えば、指導案が示す通り、第二時の学習内容は〈胎児の成長〉へ〈その緒と胎盤の役割〉〈出産〉となっている。しかし、「I was born」の詩によって、保健の学習内容に付随する大切な事がら、生命は引き継がれていくものであることや、命を生み出すには命がけの場合もあることを学習者たちは知ることになる。つまり、教師の言葉（保健）だけでは知識としてしか受け止めることができない事がらを、学習者たちは詩を読むことによって感性の側面からも受け止めることができるようになる。》

また、中心になる学習内容の周辺を詩が補うことにもなる。〈出産〉という営みを学習した後で、詩を読むことによって、誕生を喜ぶ親の気持ちを通し量ることを通して、〈出産〉が生物としての行為だけとしてではなく、中学生にとって具体的な意味を持つ。また、子どもの誕生によって父親や母親になったことに対する責任や決意というようなものを詩の言葉の中に探すこともできるだろう。（中略）生徒は、〈生命の誕生〉のメカニズムを知ると同時に、〈誕生〉に関わる人間の心をも知る。つまり、「生命の誕生」に関わる心情的な面が保健の学習内容に付加されるのである。》

ここでは、二つの教科間の相乗的な効果が指摘されている。「生命の誕生」というこの授業のテーマについて、堅田氏は、詩（国語科）は、

詩と保健の「関連」指導——詩教育の研究（6）（足立）

保健の知識・理性に対して「感性の側面」から、また「誕生を喜ぶ親の気持ち」や「子どもの誕生によって、父親や母親になったことに対する責任や決意」といった、「心情的な面」からの学習になった、と述べている。

つまり、「生命の誕生」という現象に対して、保健教材は、科学としての概念を提示する。同じ現象に対して、詩教材の方は、詩人の個人的な言語形象の世界を提示する。そこに、単元「生命の誕生」に対して、二つの教科の明確な差異があった。その差異を明確にすることで、国語科の教科内容として、「詩の機能」が改めて明らかになった。「詩の機能」が明らかになることで、保健教材の役割も確定していく。そこに、「関連」指導としての「幸福な関係」が成立していくことになったと思われる。

二点めは、教科に固有の「言葉」の問題である。異質な教科の「関連」指導において、必ずぶつかる問題である。

この実践をふまえて、堅田氏は、「詩の言葉（とくに比喩）」の役割について、次のように述べている。

《詩の言葉が、保健の学習内容にイメージをつけ加えていく働きをしている。豊かにイメージ化することで学習内容は具体的をもつ。》

例えば、保健の授業では〈卵子〉と一語ですませる言葉が「頌歌」において〈女の中に／月ごとにあたらしく創りだされて昇る太陽〉と表現され、また〈神からつかわされた／選ばれたる者のおとずれを静かに待つ／期待と／可能性の火〉というように表現される。そうすると、黒板に掲示された〈卵子〉の拡大写真が、形状や色彩を視覚でとらえるだけでなく、〈生きているもの〉として生徒は想像することが

容易になる。このことは、「詩には比喩が使われているので、保健の本よりか何倍か分かるし、何倍か想像することができます。」という感想に端的に表現されている。詩の表現方法のうち、ここでは擬人法によって、生徒の心に命ある(卵子)として豊かなイメージが生みだされるようである。

黒板に掲示された図を見るだけであれば、(精子)の形状は単におたまじゃくしに似た物として生徒の目に映るだけであろうが、新川和江の詩を併せ読むことによって(いそぐ)(およぐ)(急流をさかのぼる魚群)(水泳選手の集団)となって豊かにイメージされるであろう。(昏い谷間)はもはや(子宮)そのものではなく、本物の暗い谷間となる。(エベレストよりもけわしい峰々)という表現からは本物のエベレストがイメージされよう。その時、生徒たちは(昏い谷間)のことを、(エベレスト)を必死で急いでいるのは、(精子)の形状をしたものというより、もっと別のもの、すなわち人間の姿をイメージしているかもしれない。詩を読むことで(受精)の過程をひとつの物語として読み直すことも可能になる。

(受精卵)についてもやはり同様のことが言える。黒板に掲示される(受精卵)は受精していない卵子和比較すると色彩がことなっている。それは(夢見る真珠)の名に相応しく美しいものとして見る事ができる。それをいっそう美しく感じさせるのは(夢見る真珠)という言葉であり、(真珠は目ざめる 愛の名によって/真珠は実る 祝福された一つのめぐり逢いを孕んで)という表現であろう。

このように、提示する詩によって、イメージが豊かになり、保健の学習の理解が深化すると考えられる。比喩がイメージを喚起すると言

えよう。》

作品「頌歌」(新川和江)の比喩が、生徒たちにどのように読まれていったか。生徒たちの受容のプロセスが、具体的に明らかにされている。作品「頌歌」の中で、(卵子)は(女の中に/月ごとにあたらしく創りだされて昇る太陽)と、(精子)は(急流をさかのぼる魚群)と、そして(受精卵)は(夢見る真珠)と、鮮烈なイメージの比喩でもって表現されている。(卵子)(精子)(受精卵)は、いずれも保健学習のキーワードである。そのキーワードは、詩の中では生のまま用いられず、美しく神秘的な比喩によってイメージ化されている。堅田氏の言葉でいえば、「比喩がイメージを喚起」しているわけである。比喩表現の力である。

「比喩」による「イメージの喚起」は、作品「頌歌」だけではない。作品「I was born」(吉野弘)の(蜉蝣の雌)は、それ自身(せつない)イメージを与えながら、(僕)を生み落としてすぐに亡くなった母親像に重ねられている。(蜉蝣)は、生命誕生の「たとえ」である。作品「客人来たりぬ」(三木卓)において、「世界一新品のおやじ」というフレーズも、ユーモラスな比喩表現である。この詩では、子どもの誕生に立ち会った父親の、不器用な対応の様子が、ユーモラスに描かれている。「新品」というモノ(新しい品物・製品)をさす言葉を、父親の「たとえ」に使うことで、不慣れた父親のとまどいの様子を効果的に表現している。

「比喩」は、リズム・イメージとともに、「詩」に特有の表現方法である。みてきたように、堅田氏の開発した詩教材において、比喩表現は、作品世界のイメージ形成に大きく機能している。そして、授業において、

生徒たちも、その「比喩」をてがかりに作品の世界を受容していた。その意味で、堅田氏の比喩表現を重視した教材化は、的確な着眼点であったといえる。

三点めは、この実践を、アンソロジーの教材開発とみたときの意義である。

私は、詩教育において、アンソロジーの教材開発を、次のように大きく三つに分類している。

一つは、題材によるアンソロジーである。たとえば、「石」という題材によって、詩のアンソロジーを構成する方法である。「石」（草野心平）「石」（壺井繁治）「いしっころ」（谷川俊太郎）「つけもののおもし」（まど・みちお）のように、同じ題材でアンソロジーを構成する。詩というジャンルには、同じ題材の作品が少なくない。それでいて、題材に対する「見方」は、詩人によって多様である。その多様な「詩人の見方」を教科内容とする教材開発である（拙稿「詩教育の理論的研究(二)」『島根大学教育学部紀要』第22巻 一九八九・一二を参照）。

二つには、主題によるアンソロジーである。同じような主題の複数の詩を組み合わせる方法である。たとえば、私の実践（拙著『現代詩の授業』一九七八）でいえば、「ポエジー紀行」（谷川俊太郎の詩、みつはしちかこの詩画集、井上陽水のフォークソング・中学三年の実践）、「青春の心象風景」（安水稔和の世界・高校二年の実践）、「現代詩の意匠」（嶋岡辰から川崎洋まで・高校三年の実践）などが、その事例である。

「ポエジー紀行」「青春の心象風景」「現代詩の意匠」は、対象学年に合わせた主題である。そのように特定の主題のもとに、複数の詩でもっ

てアンソロジーを構成する、という方法である。同じ主題であっても、詩人たちの個性的なアンゲルに注目して、相対的な「詩人の見方」を教科内容とするアンソロジーである。

三つには、詩の表現方法によるアンソロジーである。詩の表現方法には、一般的な分類によると、リズム・イメージ・比喩がある。それぞれは、一般的な分類でもって、アンソロジーを構成する。表現内容に対して、表現方法でもって、アンソロジーを構成する方法である。最近よく試みられている「ことばあそび」のアンソロジーなどが、その事例である。

以上は、大まかな分類であって、実践段階ではいろいろなバリエーションも考えられる。

アンソロジーは、このように、ひろい詩の世界に対して、特定のアンゲルから同時に複数の教材開発を試みる方法である。詩教育の活性化のために、私は、不可欠の教材開発論と考えている。

ところで、堅田美穂氏の実践は、私の分類からすると、「生命の誕生」という單元名で明らかかなように、主題アンソロジーの方法である。「生命の誕生」という主題のもとに、「頌歌」（新川和江）「I was born」（吉野弘）「客人来たりぬ」（三木卓）「歌」（新川和江）の四編の詩が組み合わされている。典型的な主題アンソロジーの方法といえる。

しかし、みてきたように、単なる主題アンソロジーではない。保健という他教科との「関連」指導であったからである。

「生命の誕生」という主題アンソロジーは、もちろん、詩教材だけでも構成できる。しかし、その場合、あくまで詩教育という小さなジャンル（国語科の中の一領域）の教科内容に限定されてしまう。その限界を、堅田氏実践は、保健という科学的な教科内容を加えることによって、よ

り厚みのある教科内容に変容させていった。

詩の主題アンソロジーは、堅田氏の実践のように、他教科との「関連」指導の「基点」に位置づけていくと、詩教育の可能性を大きく広げていくことになる。堅田氏の実験授業は、その点で、アンソロジーの詩教育の先導的な実践研究であったと思われる。

（国語科教育研究室）